ゼミナール 中国文化

哲学思想編

カラー版

吾淳［著］
原玉龍［訳］

五洲傳播出版社

ゼミナール
中国文化
哲学思想編

吾 淳［著］
原 玉龍［訳］

五洲传播出版社

图书在版编目（CIP）数据

哲学思想 ：日文 / 吾淳编著 ；（日）原玉龙译著 .
-- 北京 ：五洲传播出版社，2016.10
（中国文化系列 / 王岳川主编）
ISBN 978-7-5085-3411-4
Ⅰ . ①哲… Ⅱ . ①吾… ②原… Ⅲ . ①哲学思想－中国－日文
Ⅳ . ① B2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2016) 第 273459 号

主　　编：王岳川
出 版 人：荆孝敏
统　　筹：付　平

中国文化·哲学思想

著　　者：吾　淳
翻　　译：（日）原玉龙
责任编辑：高　磊
图片提供：FOTOE　中新社
出版发行：五洲传播出版社
地　　址：北京市海淀区北三环中路 31 号生产力大楼 B 座 6 层
邮　　编：100088
发行电话：010-82005927　82007837
网　　址：http://www.cicc.org.cn　http://www.thatsbooks.com
印　　刷：北京浙京印刷有限公司
版　　次：2017 年 1 月第 1 版第 1 次印刷
开　　本：787×1092mm 1/16
印　　张：12.5
字　　数：200 千字
定　　价：108.00 元

目　次

序　……………………5

Part 1　世界の性質　………………9

天地開闢神話の盤古

蕭雲従「天問図」

信仰概念の成立　…………10

神　中国の哲学的観念における宗教の始まり　…10

無神論の概念　……………………13

自然観の形成　…………15

陰陽と五行

中国哲学における知識の根源の形成　……………16

占術の名残　……………………22

現象の観察と思考　…………25

差異と多様の概念　……………………25

変易と変化の概念　……………………29

同異と常変　……………………31

本質と規律の探求　…………34

道　……………………34

理　……………………39

気　……………………42

Part 2　事物の関係 ……………………47

天人関係　その信仰と知識背景 ……………………48

天人関係の信仰的糸口 ……………………48

天人関係の知識的糸口 ……………………53

弁証観 ……………………58

対立 ……………………58

依存 ……………………61

転化 ……………………64

相対 ……………………67

整体観 ……………………69

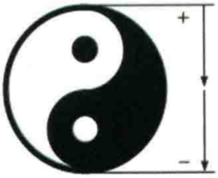
中庸 ……………………70

兼両 ……………………73

参合 ……………………75

連係 ……………………77

天を祀る玉璧（上）
地を祀る玉琮（下）



陰と陽を表す太極図

Part 3　社会の準則 ……………………81

道徳の自覚と儒家道徳の準則の確立 ……………………82

周代　道徳認識の起源 ……………………82

孔子　礼の伝統と仁の精神 ……………………87

礼楽・制度を定めた周公

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

儒家社会準則の発展 ……………………91

孟子の仁政と荀子の礼法 ……………………91

教化と中華文明の倫理伝統 ……………………95

儒家の義利観と理欲観 ……………………100

その他学派と思想の社会に対する思考 ……103

道家の無為 ……………………103

法家の法治 ……………………107

歴史観 ……………………111

各種各様の歴史観 ……………………111

歴史循環論 ……………………115

儒教の創始者―孔子

Part 4 人生の方向性 ……………………118

儒家の理想的人格とその養成 ……………………118

孔子が築いた儒家の理想的人格 ……………………119

理想的人格の養成 ……………………124

音楽と人格の養成 ……………………127

成於楽（楽に成る） ……………………127

中和の美 ……………………130

儒家の人間性理論 ……………………136

孟子 性善説 ……………………137

荀子 性悪説 ……………………140

人間性理論の発展 ……………………143

仁義王道による政治を説き、性善説・易姓革命説を唱えた孟子

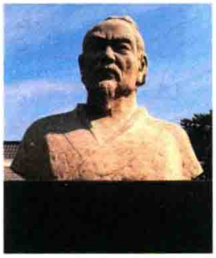
無為自然の道
を説いた老子

道家の人生観 ……………… 146

老子の人生観 ……………… 147

荘子の人生観 ……………… 149

Part 5　認識の構造 ……………… 153



無差別的博愛の兼愛
平和論を説いた墨子

倫理学・政治学・宇
宙論にまで及ぶ朱
子学を大成した朱熹

認識の来源と能力 ……………… 154

知と不知 ……………… 154

心と物 ……………… 156

名と実 ……………… 162

言と意 ……………… 165

認識の構造と形式 ……………… 168

見聞と思慮 ……………… 168

漸修と頓悟 ……………… 173

格物と致知 ……………… 175

去蔽 ……………… 177

虚静 ……………… 179

知行観 ……………… 181

初期知行観の礎 ……………… 181

言と行、知と用 ……………… 183

朱熹の知行観 ……………… 185

王陽明の知行観 ……………… 187

王夫之の知行観 ……………… 189

付録：中国歴史年代早見表 ……………… 192

目　次

序 ……………………5

Part 1　世界の性質 ……………………9

信仰概念の成立 …………10

神　中国の哲学的観念における宗教の始まり …10

無神論の概念 ……………………13

自然観の形成 …………15

陰陽と五行

中国哲学における知識の根源の形成 ……………16

占術の名残 ……………………22

現象の観察と思考 …………25

差異と多様の概念 ……………………25

変易と変化の概念 ……………………29

同異と常変 ……………………31

本質と規律の探求 …………34

道 ……………………34

理 ……………………39

気 ……………………42

天地開闢神話の盤古

蕭雲従「天問図」

Part 2　事物の関係　…………47

天人関係　その信仰と知識背景　…………48

天人関係の信仰的糸口　…………48

天人関係の知識的糸口　…………53

弁証観　…………58

対立　…………58

依存　…………61

転化　…………64

相対　…………67

整体観　…………69

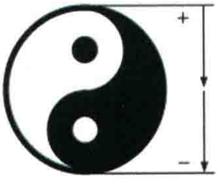
中庸　…………70

兼両　…………73

参合　…………75

連係　…………77

天を祀る玉璧（上）
地を祀る玉琮（下）



陰と陽を表す太極図

Part 3　社会の準則　…………81

道徳の自覚と儒家道徳の準則の確立　…………82

周代　道徳認識の起源　…………82

孔子　礼の伝統と仁の精神　…………87

礼楽・制度を定めた周公

儒家社会準則の発展 ……………91

孟子の仁政と荀子の礼法 ……………91

教化と中華文明の倫理伝統 ……………95

儒家の義利観と理欲観 ……………100

その他学派と思想の社会に対する思考 ……103

道家の無為 ……………103

法家の法治 ……………107

歴史観 ……………111

各種各様の歴史観 ……………111

歴史循環論 ……………115

儒教の創始者一孔子

Part 4 人生の方向性 ……………118

儒家の理想的人格とその養成 ……………118

孔子が築いた儒家の理想的人格 ……………119

理想的人格の養成 ……………124

音楽と人格の養成 ……………127

成於楽（楽に成る） ……………127

中和の美 ……………130

儒家の人間性理論 ……………136

孟子 性善説 ……………137

荀子 性悪説 ……………140

人間性理論の発展 ……………143

仁義王道による政治を説き、性善説・易姓革命説を唱えた孟子

無為自然の道
を説いた老子

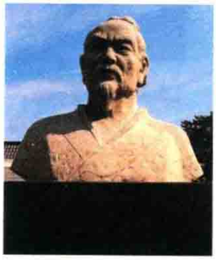
道家の人生観 ……146
老子の人生観 ……147
荘子の人生観 ……149

Part 5 認識の構造 ……153

認識の来源と能力 ……154
知と不知 ……154
心と物 ……156
名と実 ……162
言と意 ……165

認識の構造と形式 ……168
見聞と思慮 ……168
漸修と頓悟 ……173
格物と致知 ……175
去蔽 ……177
虚静 ……179

知行観 ……181
初期知行観の礎 ……181
言と行、知と用 ……183
朱熹の知行観 ……185
王陽明の知行観 ……187
王夫之の知行観 ……189



無差別的博愛の兼愛
平和論を説いた墨子

倫理学・政治学・宇
宙論にまで及ぶ朱
子学を大成した朱熹

付録：中国歴史年代早見表 ……192

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序

中国哲学とは実に奥深いものである。儒家の「仁愛の心」はあらゆるものを包み込む厚徳の精神をあらわし、中華民族の最も優れた品格である。その崇高な精神は、いま中華民族の奥深くにまで浸透している。道家の智慧は天と地のごとく広大で、河の水のごとく限りなく、中華民族の生存と発展の源泉と動力といえる。歴史から見れば、中華民族は事あるごとに古籍に智慧と哲学を求め、その教えに耳を傾け、そして自問を繰り返してきた。今日の中国人もまた同じである。事実、儒家・道家思想は中国哲学の中枢であり、全人類にとって最も重要かつ貴重な精神的遺産として、その道徳と智慧は人類のいかなる偉大な伝統とも肩を並べることができる。

本書は「中国文化シリーズ」叢書の一冊として、ひろく中国文化を紹介する目的で編纂された。限られた条件の中で中国哲学思想を丸ごと紹介するのは不可能であるし、本書の目的からもそれは必要ないと判断した。なぜなら、哲学に限らず、文学・科学・芸術など各分野においても、人々がこれらの三千年分の歴史をちらりと覗いてみようと思ったとき、それらの根幹部分に影響が深くないと思われる枝葉末節は省くものだからである。人間の認知習慣はいつも同じで、身近な例では中国人が初めに西洋の芸術・宗教・哲学を学ぶとき、覚えることといえば主要な人物と主な作品・著作といくつかの思想である。しかしながら、それらを学ぼうとするきっかけというのは、その「ちらりと覗く」たときに心ひかれるからであり、そこからまたみずから深く知ろうとするのである。

本書は、「世界の性質」、「事物の関係」、「社会の準則」、「人生の方向性」、「認識の構造」の五つのテーマにより構成されている。私から見れば、

これらはおおむね中国哲学の最も基本的な部分であって、当然その中には様々な具体的問題が存在している。特筆すべきは、上述テーマのうち第1テーマ・第2テーマは深い宗教と知識的背景が関わっており、第3テーマ・第4テーマは社会と道徳問題に言及し、数ある中国哲学の重大な思考はこれら四つの側面から展開される。筆者の近著である『中国哲学の起源――前諸子時代の観念、概念、思想発生の発生・発展と成型の歴史』も本書同様この四つをもとに理論を展開しているが、それは筆者が中国哲学の研究から得られた考え方に基づいている。もちろん、第5テーマの内容も非常に重要である。おもしろいことに、一般的に道家は第1テーマ・第2テーマ・第5テーマの方面に偏っている。これは、道家の事物の規準と宇宙の原理といった本質的かつ抽象的意義の問題に対する興味と、その深い知識的背景にも関係している。しかし、これらの哲学的問題およびその背景にある知識と説明は容易ではないため、道家は我々に独特な知識観と言語観を与える。相対的に見ると、儒家は第3テーマ・第4テーマ・第5テーマの方面に、より強い関心を持っていた。儒家の修身・治国・内聖・外王理論は、まさに「人生は格物致知に始まり、修身と道徳の学習を通して理想的人格、すなわち内聖の境地に至る。そして、最終的に社会実践、すなわち斉家・治国・天下泰平といった外王の目標実現へ向かう」といった内容を反映するものである。

上述の内容、構成および主要学派の関係を踏まえることは、本書の内容理解と中国哲学の最も基本的なすがたを知るうえで助けとなるだろう。

より完全な形で中国哲学の問題とすがたを浮き彫りにするため、本書では観念・概念・範疇と、思想・理論学説とを織り交ぜて述べる方法をとった。なぜなら、どれか一つのみを取り上げて述べた場合、読み手にとって理解しがたいばかりでなく、書き手にとっても正確に述べることが難しくなるからである。例えば、もし概念あるいは範疇だけを取り上げると、いくつかの思想家がある問題について展開する素晴らしい論述

を含めた重要な理論をはっきりと認識することができない。もし理論と学説の角度によってのみ述べると、今度は数多くの肝心な概念とその中に含まれた重要な観念を見落とすことになる。８万字という限られた紙幅の中で、いかにして内容を選別し組み合わせていくのかが課題であったが、筆者は二つの方法を採用することにした。一つは、重要なポイントを突出させて述べる方法だ。特に儒家と道家の思想、特にそれらの始祖である老子と孔子を際立たせた。事実、老子と孔子により、道家・儒家哲学の多くの基本的問題、思想および概念がすでに形成されていたからだ。次に、できる限り完全な形にするため、王充の命に対する見方、先秦から南北朝時代にかけての形神問題の見方など、要点となるものをおさえた。もう一つは、先秦時代を足がかりとする方法だ。儒家の人間性理論・人格思想、道家の弁証観など、中国哲学における多くの思想と理論は、先秦時代にすでに基本的、場合によっては十分に展開されてきた。しかるに、今日における人々の叙述も完全にこの時代の歴史を基礎としているのである。（当然ながら、知行観などいくつかの問題については後になって少しずつ完成されていったが、論述するからにはまずそれらの発展の糸口に注目するべきである。）とは言うものの、すべてを紹介できないのは避けられないため、それらについては読者の理解に求めるほかない。

本書の執筆においては他にもいくつかの特徴があり、それをもって提示ないし紹介とした。まず、本書の執筆はできる限り中国哲学そのもののすがたをお見せすることに重きを置いた。近代以来、特に当代においては、西洋哲学および思潮の影響により、中国哲学の叙述時的問題と用語の使用が西洋化し、時には「自らの身分」までも曖昧にされてしまっている。本書では、そのような影響を受けたものをできる限り「還元」し、本来の形に戻すよう試みた。例を挙げると、知識あるいは科学が中国哲学に大きな影響を与えた。陰陽・五行・道・理などの概念過程はいかにして本源と規律の問題に影響したのか、哲学と教化の密接な関係お

よびそれらがいかにして社会層のなかに定着していったのか（これについてはかつて馮友蘭先生が記された）、あるいは音楽の審美観の哲学思想における特殊な地位と意義、信仰と知識に及んで紐解いたときに現れる連続性の特徴などがそれだ。同時に、本書のもつ「国際的」性質から、筆者は本書の中で多少外国文化との比較も行なった。神と占卜に対する態度や、異なる知識的背景によって及ぼされた根源に対する意識の差異、倫理に関する中国の規準・規則とユダヤ教の規律との相似性…これらの内容は、読者の思考と興味を促すかもしれない。これらにとどまらず、中国的思考と哲学が全人類の智慧の一部分としてあり、その他のものと一定の共通性あるいは対話性を持ちあわせていることは、先ほど述べた比較内容の問題や思想、概念の中にまで反映されているだろう。

最後になったが、1998 年に筆者が中心となって編集した『中国哲学思想』教材の協力者でもある崔宜明教授のご協力に感謝を申し上げる。本書の一部には直接引用した部分さえある。私の学生である博士課程後期の蒋開天君には資料の確認作業をしてもらい、またいくつかの貴重な意見をもらった。五洲伝播出版社には、筆者に中国哲学を紹介し世に伝える機会を与えていただき、また本書のための画像提供や本書の英文翻訳などをしていただき、格別の感謝を申し上げる。

吾　淳

2013 年 12 月 10 日　上海にて

世界の性質

世界の性質とはどのようなものか。これは現象と本質の問題の一つであり、またいかなる哲学においても議論される問題である。西洋では、パルメニデスが存在について論証し、プラトンが現象の信頼性について疑問を持ち、アリストテレスが本質属性について思索し、またキリスト教哲学の神について証明したことにより、現象への注目と思考は基本的に哲学の範疇から押し出されてしまった。古代中国は対照的で、現象と本質の問題は哲学の中でそれぞれ地位を持っていた。本章では、まず「神」の問題から始まる。この問題には、多神信仰や無神論も含まれている。次に、「陰陽」・「五行」観念についてである。

古代中国人の自然に対する見方や、二つの概念の発祥と発展および中国哲学の中核的概念になるまでを紹介する。続いて、古代中国人の差異性と変異性についての見方についてである。これも中国哲学の現象に対する長期的な関心と思考の中で形成された深い認識である。最後に、中国哲学が本質問題に与えた思考についてである。これは、規律と規準の問題を包括し、また本源と本体の問題をも包括している。ここで述べる重要な概念は「気」・「道」・「理」であり、思考が確実に一般化と抽象化へと向かって動いていることを説明する。

信仰概念の成立

世界のあらゆる古代民族の文明と同じように、中国最古の人々には信仰、すなわち「神」の概念があった。この概念は三代（夏・商・周）以前（紀元前 2070 年よりも前）のはるか昔にまでさかのぼる。中国古代全体をとおして、この最古の時代に形成された信仰あるいは崇拝がずっと息づいていたのである。しかし、春秋時代（前 770 年～前 476 年）から、中国の知識人は一種の無神論や弱神的傾向をあらわにする。その後、道家・儒家にかかわらず、いずれもこうした理性的な態度を示し、これが中国思想界に軽視できない影響を与えていったのである。

神：中国哲学観念における宗教の始まり

文字について述べると、「神」という字は甲骨文の中に大量に現れる。だが、「神」の概念がもっと前に起こっていたことは疑いない。これについて、『国語』楚語下の中で楚国大夫が、射手が楚昭王に対し回答する場面を見たこと、つまり顓頊時代の「絶地天通」の故事によって証明されている。

河南省安陽の殷墟（いんきょ）から出土した甲骨。鬼神崇拝に関する文字が刻まれている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com